

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制(委員会・組織等)

データサイエンス教育推進委員会

(責任者名) 日置 慎治

(役職名) データサイエンス教育推進委員会 委員長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	令和4年度の履修者は207名、修了者は166名(約80%)であった。未修了者の大半は定期試験等における成績不良が原因ではなく、授業回数の早い段階で授業への参加をしなくなった学生であり、継続して学習をおこなった学生は修了している。 このことから、令和5年度以降は特に学生が継続して学修を行えるよう、授業内容の見直しや授業外での学習支援をより一層充実させる予定である。
学修成果	令和4年度の「特別講義(データサイエンス入門)」の成績評価の平均点は71点(100点満点)であった。また履修者に対する修了者数は約80%であることから、履修者へは適切な指導が行われていると言える。 令和5年度移行については、成績や授業改善アンケートなどにより受講者の学修成果を把握を継続的に分析し、当プログラムの学修成果をより充実させる予定である。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	授業改善アンケート(回答者数146名:回答率約70%)による「特別講義(データサイエンス入門)」の理解度に関する項目は以下の通りである。 ・「意欲的に取り組んでいるか」に対して「意欲的、ある程度意欲的」が約75% ・「到達目標に向けて力がついているか」に対して「力がついている、ある程度ついている」が約64% ・「総合的に、授業が自分に意義あるものか」に対して「意義ある、ある程度ある」が74% 以上の事から、多くの学生が当プログラムに意欲的に取り組んでいると言えるが、より効果的な学習内容となるよう、アンケート結果を踏まえて引き続き当プログラムの改善を進める予定である。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	現時点では、授業改善アンケートには後輩等他者への推奨度を測る項目を設けていないが、令和5(2023)年度からは本教育プログラムの授業改善アンケートに他学生への推奨度について確認する項目を設け、アンケート結果を踏まえて授業内容の見直しを行う予定である。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	令和5年度より、修了要件科目を特別科目群(選択科目)から教養科目群(選択科目)へと変更することで学生が受講しやすいプログラム構成へと変更するとともに、履修ガイダンス時に学生に対して引き続き積極的に告知することで、学生の受講を促進する。

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	本教育プログラムを修了した卒業生はまだいないが、本学が行っている企業向けアンケートにより、プログラム修了者の卒業後の状況や就職先企業・団体からの評価を把握する計画である。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	本学が例年実施している企業向けアンケートにおいて、本プログラムの内容や教育水準、教育手法について意見を求める設問を設けている。企業からはプログラムへの賛同的意見がほとんどであり、文系学部であってもデータサイエンス分野の知識が必要とされていることがわかる。これら企業等からの意見は、データサイエンス推進委員会へと報告し、プログラム内容等の改善に向けて活用している。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	授業内容に可能な限り実社会における応用例を示すよう工夫しており、学生は社会に出たときに当プログラムをデータサイエンスの基礎として修得していることから、それらを用いて自身の業務等へすぐに応用できるようなカリキュラムとしている。 また、数理・データサイエンス・AIの応用例は多岐に渡るが、身近な応用例を知ることは「学ぶ楽しさ」に繋がり、ビジネス社会での事例は「学ぶことの意義」の理解につながると考え、それらを含む形でプログラム内容を適宜見直すこととしている。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	毎回の授業における学生の反応や質問、課題の達成度により、前回までの復習の説明に反映させることにより、わかりやすい授業内容となるよう工夫している。授業内では、2度のレポート提出を課しており、減点対象を学生にフィードバックすることにより理解の定着を図っている。 また、授業資料はすべてTALES(e-ラーニングシステム)で確認可能にしており、学生は復習等でこれらを活用することができ、加えてTALES上からいつでも担当教員に質問することが可能にしており、学生の理解を促進する仕組みを整えている。